

「良質の医療を提供する精神科病院に
変えていくべきだと考えていた私が、いま。。」

ジャーナリスト 月崎時央

橋本武也さま

ワクワクするお話をありがとうございました。私は橋本さんとほぼ同年代なので同じ時代を生きてきた感じがよく伝わってきました。そして私の心の中にある種の嫉妬のような感情が少し湧いてきました（笑）

私は、ライターの仕事をしていましたが、子育ても区切りがついた約10年前に、会社を作り編集プロダクションとして医療や福祉の情報を発信する組織を作ろうと試みしました。この時、組織とは何か、チームとは何か、経営者とは何か、私なりに悩み試行錯誤し、7年間会社を続けましたが、結局運営がうまくできず2年前に撤退を余儀なくされました。

お話の中心的な課題であった人材のマネジメントについて、当時の私も色々な講座に出たり本を読んで学び、実践を試みましたが、しかしうまくできませんでした。結局、私には人が働く場を作る力がなかったのだと、今日改めて思いました。会社を諦め、おそらく二度と試みるチャンスはないだろう私。橋本さんのお話が、熱い思いと哲学に基づくハウツー満載だったので、それを聞きながら、少し苦しくもありました。

本日のお話で一番印象に残ったのは、私たちが生きるこの高齢社会における精神科病院の問題です。精神科病院が認知症の人々を「新たな資産」と考えて取り込もうとしていることにどうやって抗っていくかだと思います。

実は、私は数年前までは、精神科病院を、なんとかして良質の医療を提供する場に変えていくべきだと考えていました。しかし取材すればするほど精神科病院という装置はどんなことをしても根本的に良質なものには成り得ないと考えるようになり、現在は精神科病院の存在そのものを否定する立場にいます。

精神科病院は、患者の周囲の家族や社会がある人を「乱暴で手に負えない」「不

穏である」「迷惑な人間である」と邪魔者扱いする、そういう私たちの弱った心を狙ってきます。困り果てた周囲の人の緊急事態に「善意」の笑顔で「さあ、うちをご利用ください」と客引きのごとく忍び寄ってくるのだなと感じます。

そして物理的に拘束帯を使用して抑制したり、「飲む拘束衣」である薬、時には電気ショックまで使って人々を公然と暴力的に支配する場所です。そしてその後はあらゆる手段で患者さんを自分たちの固定資産として確保していきます。

橋本さんのスライドの中で紹介されていた「ほかの特養は、認知症を悪化させてから病院に連れてくるよ。最後は、入院頼まれるよ」という精神科病院の院長に対して、特養の園長（実は橋本さん）が、「ここで反論するよりも、認知症になっても、いたずらに精神科病院に入院しなくていいような京都をつくるしかない！」と決意する言葉が紹介されていたのが、とても印象に残りました。

私は現在、ライターに戻り精神科の薬の減薬をテーマに取材を続けています。認知症の場合でも精神科の病気でも、薬の多くは対処療法であり、症状を多少抑えることができても体を根本的に治せるものではないよだということが次第にはっきりしてきました。

私は人生をかけて「薬をできるだけ処方しない治療」「既に処方された多すぎる薬を最低量まで減らす」ということをテーマに、取材と活動を続けていきたいと思っています。

今後ますます必要なのは薬や権力や強制的な装置ではなく人が人を支える社会の仕組みだと思います。

橋本さんの「返礼贈与」としての介護やケアという言葉も、心に響きました。子ども、障害を持った人や、お年寄りが、医療に依存しすぎずに豊かに暮らしていく成熟した社会には、福祉の力が欠かせません。

そして本当の意味で良質な福祉の人材が必要だと思います。

京都での橋本さんの実践が日本中に広がっていくことを願っています。

ありがとうございました。